

7・8月の日本は何と言っても夏祭りで賑あう。先月は「夏越の祓い」について書いたが、今年も半年が過ぎる6月末にお祓いの神事が行われ、過ぎ去った嫌悪なことなどを洗い流し、新しく迎えるこれからの半年に向かって、心気一転し頑張ろうと祈願する祭事であった。私の居住する近くの八尾神社に掲げられた幟も「夏越の大祓」から「祭禮・夏祭」の幟と案内ポスターに変わった。



愛染まつり(上本町谷町筋)

大阪では夏祭りの口火を

夏祭りの幟(八尾神社)

切るのは、6月末上町台地、谷町筋の夕陽が丘にある「愛染まつり」である。愛染娘が宝恵駕籠(ほえかご)に乗って町を練り歩き、愛染明王の縁日にあたり良縁成就、夫婦和合を祈願する祭りである。狭い境内は人々で一杯になる。7月に入ると七夕祭りが各地で催されるが、1年に一度天の川を渡って逢瀬を果たす彦星と織姫の物語は、様々な趣

向で執り行われるので興味深い。また願い事を短冊にして笹に結わえるのも夢があって楽しい。大阪中の島では大川(淀川)に、日が暮れてから、近年LEDのランプを内蔵した

プラスチックのボールを浮かべて天の川を川面に表現した雄大な光景が、天神橋から天



七夕祭り(四天王寺)



七夕祭り(大阪中の島)

満橋間で青く続く。またこの日は阿倍野の四天王寺でも星空を模したイルミネーションが輝き、大笹に短冊を釣り下げて見事な彩りになって大勢の参拝客を呼んでいる。京都は伝統行事の祇園祭りが始まり街中は祭り一色の雰囲気になる。大阪で夏の一番暑いのは昔から天神祭りの頃と言われ、酷暑にめげず昼間は陸渡御(おかとぎょ)で街を練り、夕暮れから舟渡御が行われる。大川は篝火や灯火で水面が輝き、祭り装束に身を固め



天神祭り陸渡御(大阪梅田)



天神祭り舟渡御(大阪梅田)

た人達の鐘と掛け声が響きわたり、観光客を乗せた船が川一杯になる。クライマックスには花火も上がる。まさに大アトラクションで大阪人は本当に祭り好きだなと思う。

四国徳島では阿波おどりが人気で、数年前に訪ねて驚いたが踊る人見る人の熱気に圧倒された。激しい鐘のリズムに全身で踊る老若男女のあのバイタリテイはどこから出



阿波おどり(徳島)1



阿波おどり(徳島)2

てくるのかと思った。「踊るアホに見るアホ 同じアホなら踊らにや 損ソン」そんな調子で、人々は一体感に溢れ笑い飛ばしていた。祭りという行事は人々を酔わせてしまう魔力があるようである。やがて8月に入りお盆が近づくと祭りも死者を偲び供養する祭事に変わってくる。京都の大文字焼きや奈良の寺院で行われる地藏盆、また各地では川や海での灯籠流しのなどの行事となる。つまり私の感覚では7月は神事を中心に、8月は仏事に移っていくように思う。

元々祭りは古代から農業、林業や漁業など自然の恵みを享受して営まれてきた。それだけに自然崇拜が基本にあって、五穀豊穰や大漁を願い、自然の災害を怖れてひたすら安全祈願する行事だった。つまり神道に通ずるものであった。教祖もなく経典もないことから宗教とはいえないが、仏教は経典も哲学もある立派な宗教と言えるが一般人には難し過ぎて、日常の暮らしの中で死者を偲び供養したり、或いは自分自身の悩みや救済をうけいれてくれる仏様に親しんで来たと言えようか。



祭りの夜店で綿菓子を売っている。



灯籠流し(敦賀・気比の松原)

私のサラリーマン時代は仕事の関係で、全国の自治体が国策としてインフラの一つに環境整備事業を推進し、そのプラント建設を受注して各地に出かけることが多かった。その地の祭事や人々との交流が縁で地方文化に関心を持つようになった。サラリーマンを卒業してからは写真にも興味を持ち、各地の催事に出かけたり人々の生活ぶりを撮って楽しんできた。その中で季節の節目に祭りがあって、お宮やお寺に集まって地域の人々は交流し催事を継承してきた。青森のねぶた祭り、秋田の竿燈祭り、仙台の七夕祭りなど伝統的に大きな祭りは県単位で広域に亘り行われて来ているが、地方の中・小都市など



鯛祭り(知多・豊浜)



海に神輿を担いで大漁を祈願

は細々に行われ、祭りに参加する人達も近年はほとんど中高齢者となっている。10歳代、20歳代の若者達はあまり見かけない。彼等は大都市に移住してしまっているからである。残された年寄り達は核家族の影響もあって古い家を守り、孤立、孤独化に追い込まれている。一方移住した若者たちは厳しい経済社会と競争の激しさで敗者は交友関係も希薄になって、孤独に陥りやすくなってきている。若者達は無気力で身勝手と言われていて、結婚に対する考えや、多様化という時代の流れで物事に対する価値観も急速に変化してきている。日本では1人の女性が産む出生率は1.3で、東京では1.0と発表されている。ここまで来るととても人口増は容易でない。人生100年時代の今日、かつて親子・孫の三世代が住む家族構成へ戻り、親は高齢になっても元気で家事の手伝いをし、孫の面倒をみて、子ども夫婦は安心して仕事に出かけ、孫たちの大都会への流出を食い止めることをしないと、少子高齢化が更に進み、若者不在の地域は社会活動も衰退して行くばかりになるように思う。地方都市が活気づく政策を積極的に断行しない限り、口先ばかりの地方創生では成果は期待できないだろう。かつて昭和の時代に、田中角栄が「日本列島改造論」をぶち上げた如く、国策として大企業の地方進出をバックアップし、まだまだ残された祭りにみる地方の人々のエネルギーを結集して、地方再生の神輿を揚げ魅力ある地域社会と文化を築いてほしいものだと、そんな願いを七夕に夢を乗せてみた。



川に神輿を担いで安全を祈願。

令和6年7月 記